

創建

そうこん

2020・7・20 VOL.55 NO.1 (通巻174号)

巻頭言：サンジェイ N. パリーク・1

令和3年度 卒業研究テーマ・2～3

第13回 JIA 東北住宅大賞2019：佐久間宏一・4

令和元年度 就職状況報告・5

キャンパス強靱化計画・6

新任の紹介：高橋岳志・7

発表論文／教室ニュース・7

令和2年度 建築学教室教職員名簿・8

■日本大学・工学部・建築学教室■

東日本大震災と東京電力福島第1原発事故から10年目に入った。自然災害や人為的な災害の分野で科学技術は日々進歩しているが、いまだに解明できていない事象は多い。

例えば地震を正確に予知する手立てはいまだ確立されていないし、東日本大震災時には、津波に対応できなかったことで原発の「安全神話」が崩れ、放射能汚染という二次災害を招いた。

そして今は、新型コロナウイルスの問題が我々の生活に大きな影響を及ぼしている。人の想像を超える事態が次々と起き、それらの問題に直面する中、我々が研究する建築材料の分野で「科学」を追究することの意義を考えていきたい。



災害など我々が直面しているさまざまな問題は、人為的な要因で起こるものと自然に起きるものがある。その中で一つ、人為的な活動が影響を及ぼす「環境汚染」の問題について、科学の役割を検証したい。環境汚染などの「環境災害」は本来、人がコントロールできるものであるはずなのに、それができずどんどん悪い方向に進んでいる。他の災害と比べ、非常にスローペースで悪化が進み、それが故に、一度悪くなってしまうと元に戻すことが難しいという点も特徴的だ。地震などの災害は急激な変化をもたらすが、壊れた建物を修復できる。しかし、海や川、空気などが一度汚染されてしまうと、決して逆戻りはできない。



では、この環境災害に対して、「建築材料科学」はどのような意味を持つのだろうか。

建築業界では従来、時間がたち耐久性が落ちた建物を解体し、環境に戻すことができない廃材を燃やしたり、埋めたりしてきた。そして、これが環境の悪化を招いてきた。このように、建築業界で当たり前とされてきた考え方を塗り替える必要がある。

その一つが、建物を造る段階で「再利用」を考えるという視点だ。ヨーロッパでは「Circular Materials」という考え方に基づく法整備が進んでいる。これは、今ある建物を解体して新たに建物を造る際、その材料の80%ほどを解体する建物から再利用しなければならない、というものだ。建物をつくる段階で再利用を考えることが義務づけられ、環境調和型の仕組みが生まれている。

二つ目が、環境負荷の小さい建築材料を使うという視点だ。セメントを全く使わないコンクリート「ジオポリマー」の研究に取り組んでいるが、これも建築分野の環境問題に対する有効な手立てといえる。セメントは、1トンを作るのに約1トンの二酸化炭素を排出する。セメントを一切使用せ

環境と建築材料科学

教授 サンジェイ N. パリーク

ず、産業廃棄物（未利用資源）のみで作製するため、従来のコンクリートよりも製造過程で発生する二酸化炭素を大幅に削減することが可能になる。

また、住宅需要が高まっているインドでは、製造過程で膨大な二酸化炭素を排出するレンガを無焼成で製作にする研究を進めている。住宅需要の高まりから兆単位のレンガを製造しているインドで、無焼成のレンガが実用化されれば、二酸化炭素の削減に大きく貢献できる。

このように、環境負荷の小さい建築材料を使うという技術の研究は進んでいる。しかし、実用化に向けてはコスト面などに課題があり、実際の建築現場で応用されるまでには至っていない。このため、技術はあっても、環境負荷が大きい普通セメントコンク

リートを使うことは避けられないのが現状だ。

普通セメントコンクリートは、低コストで、世界中に広く普及し、簡易に建物をつくることができるため、現代社会で不可欠なものだ。だからこそ、その長寿命化が必要になる。

そこで三つ目に挙げるのが、建築物の長寿命化に向けた自己修復・自己治癒コンクリート技術の確立だ。自己治癒は、コンクリートに微生物のバクテリアを混ぜ、その力でひび割れを直す手法。自己修復は、コンクリートの中に管を張り巡らして内側から修復液を流し込み、ひび割れを修復するもので、実用化できれば、維持管理の手間や費用を掛けなくても、永続的にコンクリートの健全な状態を維持している。



このほか、問題が多岐にわたる環境災害に対しては、境界領域の研究を促進することも重要になる。例えば、微生物を用いる自己治癒コンクリート技術に関しては、建築材料、生物学の両方の知識が必要になる。この境界領域化ができれば、自己治癒機能のほかにも、建築のさまざまな場面で微生物を活用するという研究が進む可能性がある。ほかにも、建築と情報の境界領域では、情報技術を駆使して全自動化して建物を造るなどの研究が進むかもしれない。

このように複数の分野の専門知識を共有する形で研究が進めば、それぞれ単独で取り組むよりも、今までできなかったことがもっと簡易にできるようになるかもしれない。



繰り返すが、環境汚染の問題は、長期のスパンで破壊が進むスロースピードの災害である。そして、それに対しては、新しい考え方に基づく「建築材料科学」が果たす役割がとても大きいと考えている。建築材料科学は、環境負荷を軽減し、持続可能な社会形成に大きく貢献する分野だといえる。

令和3年度 卒業研究テーマ

現在、建築学科には18の研究室があり、分野の違いから大きく区分すると、構造、材料・施工、環境・設備、建築計画、都市計画、歴史・意匠などの系に分類されます。各研究室は、それぞれの領域で専門的な研究・教育を行っています。

卒業に必要な科目の一つである卒業研究は、4年次生の期間に一年間を掛けて取り組みます。研究室に所属し教員や院生からアドバイスを受けることで、専門的な研究を実施する

ことができます。まずは、「どのような卒業研究をしたいのか」を念頭にして、研究室を選択することが必要です。

卒業研究は論文と設計のどちらかを選択することができます。但し、研究室の分野的な特徴から、論文もしくは設計のどちらかに限定している研究室もあります。各研究室で定めている選択肢は、研究室名に続く〔 〕で表記しています。

■構造系

鋼構造デザイン研究室〔論文〕

教授：浅里 和茂

1. 応答解析による鉄骨骨組の地震時挙動に関する研究
2. 高力ボルト接合部の弾塑性挙動に関する実験的研究
3. 鋼構造接合部のFEMによる耐力評価に関する研究
4. RC煙突のライフスパン性能評価
5. 県内建物の耐震化の動向調査

コンピューテーション応用力学研究室〔論文〕

教授：ガン ブンタラ ステンリー

1. 自然現象や生物行動的のアルゴリズムを利用した建築構造物の最適化に関する研究
2. 無重力状態で自己釣り合い・自己展開できる軽量建築構造物（テンセグリティ）の創生研究
3. 折り紙の数理と幾何学に基づいた形態創生に関する研究
4. 地震時における建築物の免震効果を定量的に評価できる方法に関する研究
5. プログラミング・スキルを磨くことにより、手計算で解けない複雑な構造解析・デザインの問題の解く方法に関する研究

振動システム研究室〔論文〕

教授：千葉 正裕

1. 木造住宅の振動性状に関する研究
2. 郡山市域の地盤特性に関する研究
3. 大規模構造物の立体振動性状に関する研究
4. 建物の振動解析法に関する研究
5. 工学部構内にある情報研究棟及びその周辺地盤における地震動観測

空間構造システム研究室〔論文〕

准教授：野内 英治

1. 空間構造に関する研究
2. 各種構造の設計・解析に関する研究
3. 構造物の振動・耐震に関する研究
4. 構造解析ソフトウェアの開発
5. その他（要望に応ずる）

構造解析研究室〔論文〕

専任講師：日比野 巧

1. 耐震補強効果の評価手法に関する研究
2. 既存建物の立体振動性状に関する研究
3. 建物の減衰評価に関する研究
4. 建物の構造解析モデルに関する研究
5. 各種構造解析プログラムの開発

鉄筋コンクリート構造デザイン研究室〔論文〕

専任講師：堀川 真之

1. RC造建物を対象とした水-熱-力学モデルの開発
2. 変位型骨組要素のモデル化手法に関する体系化
3. コンクリートの局所破壊のモデル化に関する考察
4. 動的相似則を応用したRC柱の長期載荷実験の計画
5. JSCA構造デザインコンペへの挑戦

■材料・施工系

鉄筋コンクリート（RC）構造・材料研究室〔論文〕

教授：サンジェイ パリーク

1. 自己治癒・自己修復機能を有するコンクリートの開発
2. ジオポリマー（セメント使用しない）コンクリートの開発
3. 建築材料及び高強度コンクリートの防火・耐火性能とその改良について研究
4. 放射能による汚染物格納のため超重量・遮蔽コンクリートの研究開発
5. インド住宅用の省エネ新構法や歴史的石造建造物調査・保存の研究

建築材料学研究室〔論文〕

准教授：齋藤 俊克

1. ポーラスコンクリートの静弾性係数推定法の確立
2. ポーラスコンクリートの強度及び耐久性の改善
3. ポリマーセメントモルタルの各種試験法の検討
4. ポリマーセメントモルタルの新しい調合因子の確立
5. 自然環境下におけるコンクリート系材料の耐久性評価
6. 高耐久性塗料の性能評価
7. 産業副産物の建設材料としての有効利用

■環境・設備系

環境工学研究室〔論文〕

教授：濱田 幸雄

1. 高機能遮音木床の開発
2. 風車音の測定法に関する研究
3. 風力発電施設からの騒音伝搬モデルの構築
4. 床衝撃音の評価方法に関する研究
5. 集合住宅の遮音性能水準に関する研究

建築設備・防災研究室〔論文・設計〕

教授：森山 修治

1. 病院や住宅の省エネルギーと災害時の生活継続計画の研究
2. 古民家や歴史的建造物の防災と保存に関する研究
3. 古民家の居住快適性に関する研究
4. 浜通り地方の津波避難計画に関する研究
5. 老人福祉施設等の火災安全計画
6. 水害対策とキャンパス強靱化計画

■建築計画系

建築計画研究室〔論文・設計〕

教授：浦部 智義

1. 文化・医療・教育など施設・空間計画に関する研究
2. 農村舞台など地域資源の役割・活用に関する研究
3. 建築・都市における空間知覚・認知に関する研究
4. 構法も含めた環境デザイン建築に関する研究
5. 震災後の復興・住まい・まちづくりに関する研究

空間デザイン研究室〔設計〕

特任教授：渡部 和生

1. 近代建築の空間デザインの再考
2. 設計デザインのタイプ別考察
3. これからの現代建築の展開の考察
4. 実際の建物を見ながら空間デザインを確認する

住環境計画研究室〔論文・設計〕

専任講師：市岡 綾子

1. 居住空間、住環境、子育て環境に関する研究
2. 子どもを中心とした環境行動に関する研究
3. 景観まちづくり・景観学習に関する研究
4. 地域におけるまち資源の活用に関する研究
5. 復興まちづくり・地域と協働するまちづくり

建築・地域計画研究室〔論文・設計〕

専任講師：宮崎 渉

1. 温泉街のまちづくりに関する研究
2. 木質空間の印象評価に関する研究
3. 沿岸地域計画に関する研究
4. 景観まちづくりに関する研究

医療・福祉建築デザイン研究室〔論文・設計〕

専任講師：山田 義文

1. 医療的ケアを必要とする重度障がい者の居場所づくり
2. 地域包括ケアシステムにおける医療・福祉建築の連携
3. 超高齢社会における持続性のある福祉住環境デザイン
4. 既存建築物の小規模多機能型福祉拠点への転用計画
5. 医療・福祉建築におけるUDの適応プロセスと課題
6. 医療・福祉建築の運営と建築特性に関する国際比較
7. 医療・福祉建築のデザインに関わる各種法規の分析

■都市計画系

都市計画研究室〔論文・設計〕

教授：廣田 篤彦

1. 台風19号における避難行動に関する研究
2. 空き家の実態と対応に関する研究
3. 地方都市における道の駅の運用に関する研究
4. 風評被害と観光動向に関する研究
5. 緊急事態宣言下における外出行動に関する研究

■歴史・意匠系

建築歴史意匠研究室〔論文・設計〕

教授：速水 清孝・助教：高橋 岳志

1. 建築・都市の歴史に関する研究
2. 建築・町並みの保存と活用に関する研究
3. 建築技術の歴史に関する研究
4. 建築家の作家論に関する研究
5. 建築技術者の職能と法制に関する研究
6. 木質建築の生産システムに関する研究
7. 画像解析技術を用いた集落・外空間の構造分析に関する基礎的研究

建築史研究室〔論文・設計〕

専任講師：山岸 吉弘

建築史研究室では、各自で自由に卒研テーマを設定します。「建築史」という観点からの研究であれば、論文だけでなく設計を選択することもできます。

これまでに取り組まれた主なテーマには、「社寺、民家、城郭、まちなみ、都市、宿場町、職人」などがあります。今後は積極的に歴史・文化とデザインの研究を実施する予定です。

第13回 JIA 東北住宅大賞2019 大賞受賞

＜川内の家＞ ～震災復興の願いを込めて～

(株)エア・コーポレーション
非常勤講師 佐久間宏一

■故郷と建築

川内村は東日本大地震・福島第一原発事故で直後に全村避難した。避難指示が解除され、戻ることを決意した家族（両親＋夫婦＋子供2人）の家が＜川内の家＞である。当初建主の希望は、2つの住宅を解体してからの2世帯住宅の新築であったが、建主の故郷に根付こうとする意識、故郷の大地に対する想いを伺い、建替えからリノベーションへと意識が向いた。建主は私のリノベーション提案に対して当初戸惑っていた。木造住宅は古民家のように太い柱や梁を使った家屋ではなく、脆弱な構造体と粗末な仕様で、鉄骨造住宅は階高2.4mの2階建て、全ての部屋の天井高さは2mと低く窮屈で夏暑く冬には冷え込む、倉庫を兼ねた家屋だったからである。しかしながら木造の家屋は工業化住宅ではない大工の手による在来工法で、加えて建設に使用した材料は建主のお父さんが自分の山から切り出してきた木材を使用している。また鉄骨造の家屋は近所の鉄骨屋さんが建てた重量鉄骨造であり、2.4mの階高は空間を魅力的に構成するのに充分であった。設計や施工を進める間に建主の考えが変わり、やがて楽しみへと変わっていった。新築では、快適で美しく良い家で留まったに違いない。結果、予想以上の喜びの言葉を建主から頂いた上に、そして東北住宅大賞の審査員からは並々ならぬ震災復興の願いが込められているとの講評を頂いたことは大変光栄であった。何故なら振り返って＜故郷と建築＞というコンセプトを正しく表現出来たと思えるからである。

■建築に出来ること

建築とは建物を建てるだけではない。東日本大震災以降その意識は特に強くなっている。だが復興で出来ていく姿は不動産としての住宅と施設・建物、どこにでもある団地や街。

いつしか建築コンペと呼ばずに施設コンペとさえ言うようになっていく。建築という概念が疎まれていく危機感を感じる。私の願いは＜建築＞がごく普通に存在することだ。その中で特別な建築があっている。

私はモノより人間に関心が強い。だから人間的なスケールや小さなスケールにこだわる。コラテラル・ビューティーに理想を感じる。そして建物より空間に意識が向く。空間は様々な人や所作、物事そして時間さえも繋いでくれるからだ。川内の家はリノベーションだったこともあって、空間の在り様を探り、空間の構成・創造を探ることに集中できた。さらに美しい風土や建主が培ってきた日常や感性の中で、その創造は案外容易で探検するような楽しさを建主と味わった感がある。その結果居心地の良い空間が生まれ、暮らしへの愛着を育み、故郷というテーマを建築的に満足させることが出来たと考える。思うに私たちの身の回りには普段気付かない美しさがたくさん在る。現在の川内村には天山文庫という資産がありながらも、建築という概念は残念ながら根付いていない。川内の家は特殊な事例のように扱われ、プレハブ的な住宅やアパートの建設が進む。それは川内村に限ったことではなく、福島県は基より日本全体に言えるのではないだろうか。建築とは何だろうか？建物を建てるだけを超える何かがあり未来をつくるのだ。学生諸君には是非＜建築＞の大切さを学んで欲しい。

【建築概要】川内の家：所在地 / 福島県双葉郡川内村上川内字林 36, 主要用途 / 専用住宅（2世帯住宅）、建築面積 / 206.87㎡, 延べ床面積 / 232.08㎡, 階数・構造 / 親世帯 / 木造, 子世帯 / 鉄骨造一部木造, 建築種類 / 2棟リノベーション, 設計・施工期間 / 2016年3月～2018年5月



ひな壇の植栽と東側台地に開いた室内（子世帯）



何気ない景色を特別な空間に仕立てる（子世帯）



川内の山並みと建物全景

令和元年度 就職状況報告

工学部への求人企業数は935社あり、その内の396社(42.4%)は東京都の企業で最も多く、東北の企業は次いで155社(16.6%)となりました(表1)。一方、東京都の企業へは70人(40.9%)の学生が就職し、東北の企業へは43人(25.1%)の学生が就職しました。

企業業種別では、例年と同じく建設・エンジニアリングの

業種が多く54名(27.7%)の学生が就職しました(表2)。また、住宅・不動産の業種が51名(26.2%)と目立って数が増えていることは、当年度の特徴の一つです。推薦応募を利用して就職した学生は4名のみと少ない結果となりました。積極的に推薦応募の求人枠を利用することは、よりよい就職活動に繋がりますので、ぜひ活用して下さい。

表1 地域別求人企業数・就職者数

	求人企業数 (社)	%	就職者数 (人)	%
東京都	396	42.4%	70	40.9%
関東	151	16.1%	25	14.6%
北海道	8	0.9%	0	0.0%
東北	155	16.6%	43	25.1%
甲信越	40	4.3%	4	2.3%
東海	55	5.9%	12	7.0%
北陸	15	1.6%	0	0.0%
近畿	83	8.9%	14	8.2%
中国	19	2.0%	1	0.6%
四国	7	0.7%	1	0.6%
九州	6	0.6%	1	0.6%
沖縄県	0	0.0%	0	0.0%
外国	0	0.0%	0	0.0%
計	935	100.0%	171	100.0%

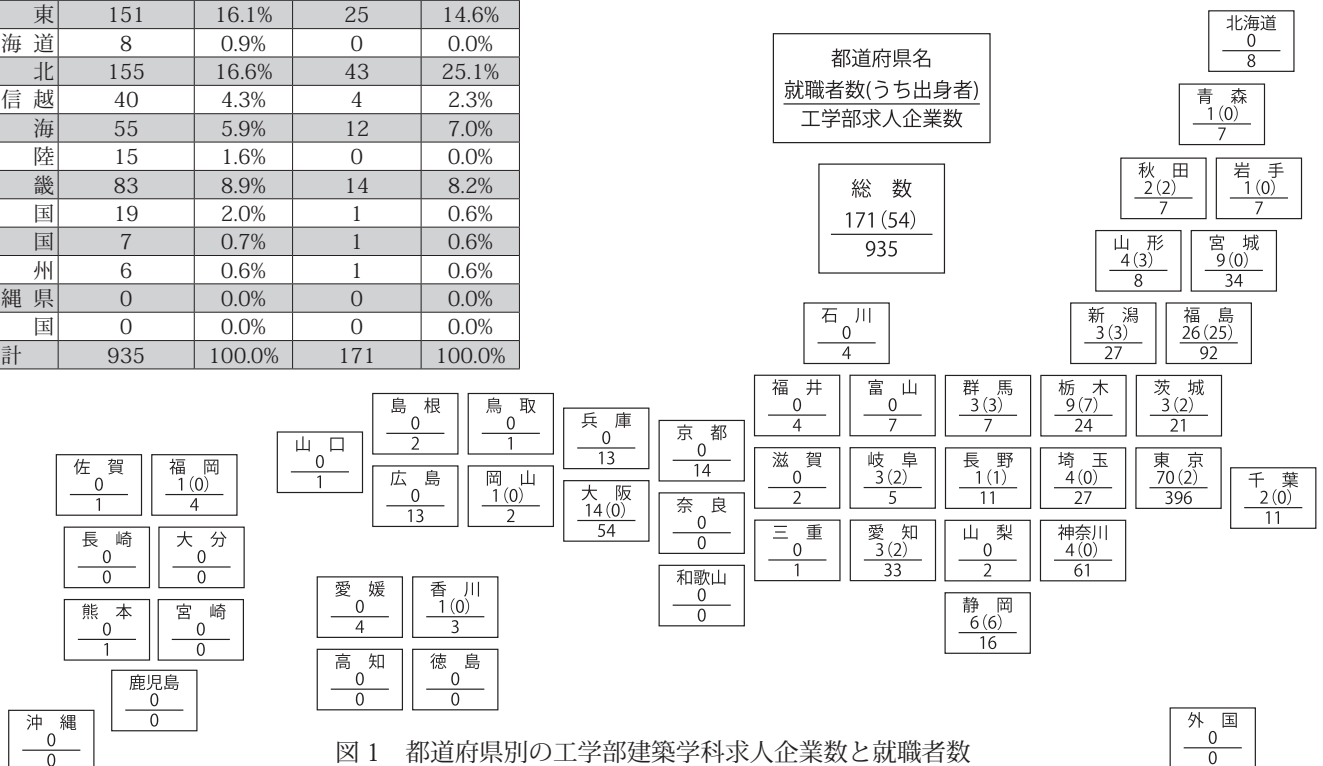


図1 都道府県別の工学部建築学科求人企業数と就職者数

表2 企業業種別にみた就職者数と応募区分

就職先業種	就職者数						応募区分	
	男子		女子		計		推薦応募	自由応募
建設・エンジニアリング	50	31.8%	4	16.7%	54	29.8%	1	46（3）
建築設備	9	5.7%	0	0.0%	9	5.0%	2	5
公務員	9	5.7%	2	8.3%	11	6.1%	0	11（2）
住宅・不動産	39	24.8%	12	50.0%	51	28.2%	0	34（11）
製造業・建築関連	11	7.0%	0	0.0%	11	6.1%	0	10
設計事務所・コンサルタント	18	11.5%	2	8.3%	20	11.0%	0	15（1）
その他	12	7.6%	3	12.5%	15	8.3%	1（1）	7（1）
進学	9	5.7%	1	4.2%	10	5.5%		
総計	157		24		181		4	128

※ () は女子で内数。

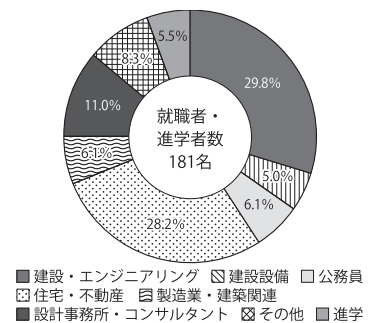


図2 進路先分布

主な進路先▶大成建設(株) 鹿島建設(株) (株)安藤・間 (株)熊谷組 戸田建設(株) 五洋建設(株) (株)フジタ 松井建設(株) 東急建設(株) 佐藤工業(株) 金田建設(株) 光建工業(株) クレハ錦建設(株) 住友林業(株) 積水ハウス(株) 大和ハウス工業(株) セキスイハイム東北(株) タマホーム(株) (株)オノヤ (株)穴吹工務店 大東建託(株) JR東日本ビルテック(株) (株)ビーエス三菱 (株)ユアテック (株)遠藤照明 未来工業(株) (株)橋本店 (株)藤田建装 (株)洞口 (株)乃村工藝社 (株)ドラフト (株)教育施設研究所 (株)羽田設計事務所 (株)ボーダレス総合計画事務所 (株)中山建築研究所 (有)阿部直人建築研究所 中日本ハイウェイ・エンジニアリング東京(株) 東京電力ホールディングス(株) 東北電力(株) 日本原子力発電(株) 茨城県 静岡県 秋田県 いわき市 須賀川市 西郷村 福島市 本宮市 練馬区 (学)帝京安積学園 一般財団法人新潟県建設技術センター

キャンパス強靱化計画

■学生へのアンケート

令和元年東日本台風により、日本大学工学部のキャンパスとその周辺の徳定地区一帯は、甚大な洪水被害を受けました。キャンパス周辺に居住する学生は、避難や生活復旧において多くの課題に直面したと考えられます。大学ではキャンパス強靱化計画を立ちあげ、洪水時の学生の避難や生活復旧の実態を把握することで、今後のキャンパス計画や防災計画を見直すこととしました。実態調査は、インターネットアンケートを実施し、調査対象者は日本大学工学部の学生約4000名としました。実施期間は2019年12月18日～2020年1月24日の約1ヶ月間を設定し、597件の回答を得ました。

回答から、被災時に工学部キャンパス周辺で生活をし、かつ実際に避難した172名を抽出し避難状況について分析を行いました。下記にアンケート調査結果の一部を示します。

・避難先の分類（図1）

避難所が39%、次に友人宅が36%となっており、7割以上の学生が避難所と友人宅へ避難しています。また、2%の学生が避難場所に指定されていない大学へ避難したことを把握しました。

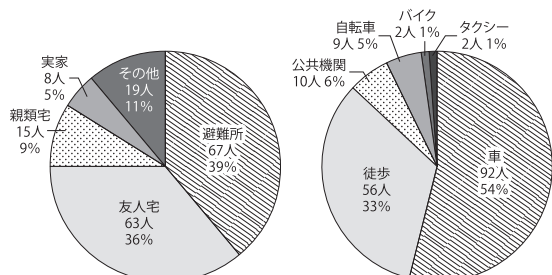


図1 避難先の分類 図2 避難手段の分類

・避難手段の分類（図2）

避難の移動手段では、車で避難した学生が54%、次に徒歩が33%という結果を得ました。

・工学部学生の主な避難先（図3）

学生が避難した避難所と人数を図3に示します。徒歩で避難した学生の数（ ）内に示しました。徒歩で避難所に避難した学生は、近くの帝京安積高もしくは高瀬小へ避難しています。車で避難者は比較的遠くの避難所へ移動しています。安積第一小への避難者の多くは、工学部へ避難した後に大学職員の手で移動した学生です。

■アンケート調査結果

今回の調査では、学生の避難場所や避難手段を把握しました。その結果、豪雨のためか徒歩の避難者は近くの避難所へ、車で避難者は阿武隈川から離れた避難所へ移動しています。また、自由回答（未記載）では、「大学を避難所として開放してほしい」という記述が多数ありました。今後は、学生が安全かつ確実に避難できる方策の検討が重要です。（宮崎渉）



図3 工学部学生の主な避難先と避難者数

■キャンパス強靱化計画

アンケートの自由回答にあった「キャンパスを避難所」にするために必要な条件を検討すると以下ようになります。

・地盤標高が高く洪水の影響が少ないこと

土木工学科の調査によると、キャンパス内の地盤標高の最低が45号館（227.751m）、ついで16号館（227.873m）、15号館（227.873m）とのことです。一方、最高が武道館（229.926m）、ついでハットNE（229.813m）と70号館（229.813m）です。そのため地盤標高からの浸水深は、最大で45号館近傍の約2m、最小で環境保全・共生共同研究センターの約0.3mです。徳定川を挟んでキャンパス南側は北側に比べて地盤標高が約2m高いことが分かります。一方、管財課が調査した建物浸水被害の概要を図4にまとめました。ハットNEと70号館の浸水被害が少ないことがわかります。70号館の1FLからの浸水深は約3cmでした。

・建物規模が大きく、2階以上の床面積が大きいこと

70号館の延床面積が最大（20,172㎡、地上9階、地下1階）で、避難スペースとなる2階以上の床面積が大きいことから、70号館が最も避難場所に適していると考えます。

・インフラ設備が整っていること。

70号館には、専用の非常発電機が設置されており停電に強いことや、雨水利用槽があり大雨時にはトイレ洗浄水には不足しないことが予想されます。飲料水に関しては、キャンパス全体の給水の約8割が井戸水であり、井戸ポンプが停止しない限り飲料水が不足する心配はありません。

■今後の課題

洪水時の学生みなさんの避難行動を予測し、キャンパス内に安全な避難場所と避難経路を確保したいと考えます。さらにはキャンパスまでの安全な公道の確保については行政とも協議する必要があります。より安全で安心してすごせるキャンパスにするために、学生の皆さんからより多くのご意見をいただきたい。（森山修治）



図4 日本大学工学部 建物の浸水被害

参考文献：キャンパス強靱化プロジェクト報告書、2020年3月31日、日本大学工学部

新任の紹介

助教 高橋 岳 志

担当科目：インテリアデザイン



今年度より日本大学工学部に助教として着任しました高橋岳志です。3年前から非常勤講師として「建築設計演習Ⅱ」を担当してきましたが、4月から常勤の教員となり、より多くの授業を担当します。とは言っても、コロナ禍の影響で現時点では学生の皆さんと会えず実感が湧いていません。もう少し早くすれば会えるのですが、今までとは違う形になるのでしょうか。ただ、私は良い意味で違う形になると考えています。比較的前向きです。

私は皆さんと同じ日本大学工学部建築学科の出身です。岐阜生まれ岐阜育ちの私にとって東北、郡山は異郷の地でした。25年前の4月、東海道新幹線から東北新幹線に乗り換え、まだ田起こしがされていない田んぼが広がる風景を見て、寂寥たる思いに駆られた記憶が未だに残っています。

始まった大学生活、入学して二年間は物足りなさを感じました。少しだけ期待した華やかな大学生活ではなかったし、建築はやりがいはあるが、面白く感じなかったのです。何より学生番号に近い友人との時間は大して面白くなかった。

3年の初め、建築家の展覧会、講演会、オープンハウスに誘ってくれる友人ができ、それをきっかけに少しずつ建築に面白みを感じ始めました。秋にはゼミに所属しました。歓迎会に行くと怖そうな人がいる研究室でした。出来るだけ関わりを持ちたくないと思うくらい。正月明け設計演習の課題を仕上げるため早めに岐阜から戻っていました。自宅の電話が鳴りました。研究室の怖い先輩でした。「お前、最近Macを買ったらしいな。Macを持って研究室に来い。課題も学校で

やれ。」何やら卒業設計のためのレンダリングが先輩のパソコンでは上手く出来ないらしく、新しくMacを買った自分に電話がかかってきたのです。不安も感じつつもMacを持って研究室に行きました。そこから四年間研究室に入り浸りました。建築を見に行ったり、コンペをしたり、研究したり。建築が好きな先輩（怖かった先輩も）、同級生たちと過ごし時間は面白かったし楽しかった。

5年間所属した設計事務所では盆前と年末に飲み会があり、二次会は決まって事務所に戻って夜半まで建築談義。当時、事務所は大きな仕事を終え仕事の閑散期。求めているわけではないけど多くの給料が貰えた訳ではなく、このまま建築を続けて家族を持ったり、自分がやってもらったように子供に学費を出したりができるか、不安がありました。盆前か年末かの飲み会で、そんな不安をボスの阿部直人さんに話しました。阿部さんは一言。「大丈夫だ！建築を続ければ君には明るい未来が待っている！」その一言を聞いて不安になることを考えるのをやめました。そして建築を続けて独立したのです。でも、あの時の阿部さんは多分酔っていた。

2013年の夏、瀬戸内の小さな島に行った時のこと。夕方、港でフェリーを待っていると地元の人が楽器を持って燦燦午後集まって来ました。赤ちゃんを抱っこするお母さん、真面目そうなお姉さん、モヒカンのお兄ちゃんなど様々。フェリーが離岸。夕陽をバックにした合奏は心にじんわりと染みしました。そして、なぜか涙がでました。自分には手に入れない何かを見た気がしたのです。20年前に岐阜を出て岐阜に戻らないという選択をした自分には手に入れない、見た目は全く異なる彼らを結ぶ、島という繋がりを。

岐阜を出て25年が経ちました。福島県出身の妻と結婚して10年目。現場の職人さんとの距離を縮めようとわざと訛っていたつもりが、訛っている妻のおかげで自分の訛りに気が付かないくらい訛っています。そんな訛りを聞いた親と親戚は、私が岐阜に帰ってくることを諦めたようです。子供が生まれ、家を建て、本籍も福島に移しました。そして今年、母校の常勤教員となりました。7年前、得られないと思っていた繋がりが、まだ細かいけど繋がりが始めていると感じています。

研究発表

- ・ 出村克宣、齋藤俊克、武田昌也、「ポリマーセメントモルタルの耐透水性及び耐久性に及ぼすポリマー混入率の影響」、セメント・コンクリート論文集, Vol.73, pp.95-102, March 2020.
- ・ 武田昌也、齋藤俊克、出村克宣、「ポーラスコンクリートの静弾性係数推定への日本建築学会 New RC 式の適用性」、セメント・コンクリート論文集, Vol.73, pp.163-169, March 2020.
- ・ 浦部智義、芳賀沼整、渡部昌治、早川真介、「応急仮設住宅の移設再利用の実態に関する研究—東日本大震災後に福島県内に建設された買取り型仮設住宅を対象として—」、日本建築学会技術報告集, 26 巻 63 号, pp.667 - 671, June 2020.

■第 83 回日本建築学会東北支部研究報告会

- ・ ポーラスコンクリートの圧縮性状に及ぼすセメントの種類及び粗骨材岩種の影響
- ・ 郡山市内の小規模医療施設におけるバリアフリー環境整備及び人的支援に関する研究

(報告会は中止)

○武田昌也、齋藤俊克、出村克宣
○山田義文

■ 2020 年度日本造園学会全国大会

- ・ 須賀川市翠ヶ丘公園の社会実験「ブックガーデン」における居場所づくり
- ・ 白河市における歴史的風致形成建造物の現状把握

日時：令和2年5月23-24日 会場：web開催
市岡綾子
岡部真純、市岡綾子

■出村教授は、「私の日曜論壇」（民報印刷）を、3月6日に出版された。

■本学に永年勤務され、その間工学部長を4期（12年）務めて、教育と研究に活躍された出村克宣教授が3月31日に退官された。

■白河市は、市岡専任講師と市岡研究室を

教室ニュース

中心とした学生有志が支援した令和元年度の景観学習活動を、「まちのすがた No.3 ～景観学習で学んだこと～」としてまとめ、

HPに掲載された。なお、一部を岡部真純さん（市岡研 M2）が制作、鈴木太郎君（市岡研 R 元年度卒）がイラストを担当した。

■市岡専任講師は、5月1日、郡山市より郡山市都市計画審議会委員を再度委嘱された。

■市岡専任講師は、福島県よりふくしまユニバーサル推進会議委員を再度委嘱された。

令和2年度 建築学教室教職員名簿

■専任教員

教授	浅里和茂	鋼構造	16号館	1階	106	8734
教授	浦部智義	建築計画	45号館	3階	304	8743
教授	千葉正裕	構造力学	16号館	2階	204	8733
教授	濱田幸雄	建築環境工学	16号館	3階	310	8752
教授	速水清孝	近代建築史	9号館	3階	310	8872
教授	S.N. パリーク	建築材料学	9号館	1階	102	8747
教授	廣田篤彦	都市計画	9号館	3階	308	8749
教授	ブンタラ S.G.	建築基礎構造	16号館	2階	206	8735
教授	森山修治	建築設備	16号館	3階	311	8751
特任教授	渡部和生	建築設計	45号館	3階	301	8750
准教授	齋藤俊克	建築材料学	9号館	1階	114	8740
准教授	野内英治	応用力学	16号館	2階	207	8744
専任講師	市岡綾子	建築計画	45号館	3階	305	8746
専任講師	日比野巧	構造力学	16号館	2階	205	8753
専任講師	堀川真之	鉄筋コンクリート構造	16号館	3階	106	8734
専任講師	宮崎涉	建築関連法規	45号館	2階	207	8742
専任講師	山岸吉弘	日本建築史	9号館	3階	309	8737
専任講師	山田義文	建築計画	45号館	2階	205	8741
助教	高橋岳志	インテリアデザイン	9号館	3階	310	8872

■大学院 兼任教員・非常勤講師

非常勤講師	宇都宮雅人	建築職業倫理特論	16号館	3階	310	8752
非常勤講師	熊倉洋介	建築設計計画特別実習	45号館	3階	304	8743
非常勤講師	濱尾博文	建築構造設計特別実習	16号館	1階	106	8734
非常勤講師	矢野英裕	建築意匠特論	9号館	3階	310	8872
非常勤講師	米田正彦	建築職業倫理特論	16号館	3階	310	8752

■学部 非常勤講師

非常勤講師	阿部直人	建築設計	45号館	3階	301	8750
非常勤講師	金谷祐昭	建築測量演習	9号館	1階	102	8747
非常勤講師	栗原隆	建築設計演習Ⅲ	45号館	3階	301	8750
非常勤講師	近藤道男	建築設計演習Ⅳ	9号館	3階	310	8872
非常勤講師	佐久間宏一	建築設計演習Ⅰ	45号館	3階	304	8743
非常勤講師	佐藤英次	建築設計	16号館	2階	207	8744
非常勤講師	佐藤好男	建築測量演習	9号館	1階	102	8747
非常勤講師	田中直樹	建築設計演習Ⅰ	45号館	3階	301	8750
非常勤講師	田中雅美	建築設計演習Ⅲ	16号館	3階	311	8751
非常勤講師	田中正良	建築施工Ⅰ	16号館	2階	204	8733
非常勤講師	出村克宣	建築材料実験	9号館	1階	114	8740
非常勤講師	寺嶋守	建築設計演習Ⅲ	45号館	3階	301	8750
非常勤講師	鍋田知宏	建築造形演習	45号館	3階	305	8746
非常勤講師	原澤一仁	建築設計	16号館	2階	207	8744
非常勤講師	檜山延雄	建築設計演習Ⅱ	45号館	3階	301	8750
非常勤講師	平野由朗	建築設計演習Ⅳ	45号館	3階	304	8743
非常勤講師	森田健一	建築施工Ⅱ	16号館	2階	204	8733
非常勤講師	渡邊宏	建築設計	45号館	3階	301	8750

■事務職員

教室事務	小林まゆみ	建築学科センター	16号館	3階	309	8730
------	-------	----------	------	----	-----	------

(共通電話局番：024-956)

編集後記：本号より新体制で編集を行っています。担当するにあたり、過去の創建を見返してみました。さまざまな記事があり、時々の建築学科の雰囲気が

紙面から伝わるようでした。学科の「今」をお伝えできればと思います。(山岸) お願い：編集室までご意見・ご感想をお寄せ下さい。ceb.soukon@nihon-u.ac.jp